昭和十二年
丁丑九紫歳
大氣運行過程
特261
958
始

特261
958

氣學講堂

氣學講堂略緣起書

發行所寄贈本

氣學講堂は今より千三百餘年前、推古天皇の十年十月百濟の僧、勒勒(ケンロク)の奉獻せる暦、天文、地理、遁甲、方術の五書に據り聖德太子の創めて我國に於て自然科學を講ぜられたる御學問所を古都長岡皇城址に復興せしものとす。

抑々、宗教とは樓閣伽藍に非ず、神官僧侶に非ず、經文戒律に非ざるなり。則ち之を要約すれば、宇宙、大氣原子の爲す先天及後天作用を人の生存に善導實用せしむる方則にして、生きんとする者の生きんとする軌(ミチ)に故障あらしめざるを垂示するを以て其本義とす。

氣學講堂は聖德太子御在世の文化を今に移し宇宙、大氣原子に關する萬古不易の方則を講授して人をして其幸福安寧を保持增進せしむる講學所とす。

氣學天壇 (愛宕山)

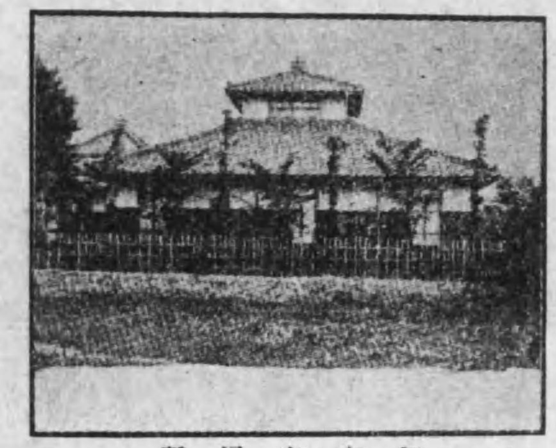
氣學天壇創設概誌

文殊菩薩の書畫し弘法大師の持來せる佛教の奥義曼荼羅は宇宙構成の形相を圖示せるものにして即ち大氣原子の實象を想像摸寫せるものとす。抑々宇宙、大氣原子の實象は之を極樂莊嚴とも謂ひ九氣七色より成る麗美的氣粒にして一旦之れが密集連合せる氣層を實視するや異樣なる神美感を生じ爾後如何なる美的現象も之に如(シ)かざるを覺ゆべく且續いて祐幸なる天運の澎湃に接し人生怡樂の歡喜を味得するに至るべし。

されば人皆之を映感せんと湯望するも九六の祐氣を修齊せざれば之を得ず古來獨り善導大師(淨土宗始祖)あるを聽くのみ

氣學天壇は此の萬物構成の基元たる宇宙大氣原子に就いて占照究理する所にして又九六の祐氣修齊者に密教曼荼羅の具現及現世に於て其現身に天國淨土の實象を觸感せしむる修驗所たり。

今や宇宙眞理を僞裝糊塗せる西歐科學の行詰に際し天照大神の明示し賜へる我が八咫(ヤタ)哲學の漸く皇輝を伸べて現代人に其處生の誤謬を正し以て人類の福祉を增進せんとするものなり。



氣育安居所

氣育安居所由來記（舊九六修齊堂改稱）

老子は無の教育を唱導し釋迦は四回以上安居（祐氣を用ふ可く一定場所に遷居するを謂ふ）せる者に和尚の僧位を贈り古來大氣教育は宗教的行事の裡に隠れて現はれず弘法大師亦之れが顯揚の具體策として弘仁八年紀州高野山上に法域を結界し中央に根本大塔を建立して之を金剛峰となし其東方に楊柳山、巽方に摩尼山、南方に姑射山、坤方に虎ヶ峰、西方に應神山・乾方に辨天嶽、北方に宇宙ヶ峰、艮方に勝蓮華院山の九峰を撰し之等の山から山、峰から峰への移居動身を以て初めて之を人に活用實施するの緒に就きしが不幸天業中道にして薨ぜられぬ。中央氣育安居所は弘法大師の施設に倣ひ老子釋尊の意を體し宇宙大氣原子の先天及後天作用の實施を一堂の内に収めたるものにして即ち東方に登進舍、巽方に齊風舍、南方に九六舍坤方に地役舍、西方に靜澤舍、乾方に乾天舍、北方に一始舍、艮方に止動舍、中央に太極溜間の九室を設け之等の室から室への移居動身を以て所謂大氣教育を人身保有の本命の氣に授け人の天運の改善助長を圖る所とす。

○八咫鏡と神の體用

八咫とは全能の用を謂ふ。抑々神は其體は無、其用は全能にして之を宇宙に存する大氣原子と爲す。

大氣原子は極微なる八角立方の粒形を爲し無の體を以て萬物に保含せられ其の太極を定むるや天地と同行して一切の生成化育を司る。則ち神の體は八角の粒形にして九氣七色より成り神の用は九種と定まり天地と共に無窮たり。

畏くも八咫鏡は此の萬物に對し生成化育を司る宇宙大氣原子を示象せられしものにして皇宗の以て治國の基となし賜ひ列聖の以て尊嚴の極となし賜ふ所なり。

我邦の古來神國たる所以は實に此の八咫鏡の鎮護に發すと謂ふべし。

○氣學の創始

宇宙生類の生存は大氣の保有呼吸に基く。人も誕生の際母體と別個に大氣を稟保するものにして之を人の本命の氣と稱し本命の氣の一極は生涯、人の生存と天地大氣の生動との連繫を爲すものとす。

抑々現代世界の學界を擧げて是認せられつゝある大氣即ち空氣の組成は今より百六十餘年前近世化學の祖と仰がるゝ佛蘭西人ラヴアジエー氏の實驗を以て解說せられ因襲の久しき遂に不信の裡に之を確定して怪まず既に一般學徒の通念と爲り居るも元來ラヴアジエーの實驗は窒素の固形物たる水銀を硝子管中に於て長時間熱し其氣體分離を求めたるものに過ぎざれば管中に於ける空氣の成分に窒素の多かる可きは自明の理なり。

（ラヴアジエーの實驗によれば空氣の化學的成分は左の如しと爲す）

空氣百分中	窒素	七八、〇三	酸素	二〇、九九	其他	〇、九八

されば大氣即ち空氣の成分は今やラヴアジエーの實驗を非とし新たに窮理せられざる可からず、則ち大氣は人の感能に感ぜざる人の肉眼に映ぜざる大氣原子と稱する八角立方體極微粒子の密集より成れるものにして大氣原子そのものも亦其體（カタチ）（形体）八個の異類なる氣體粒子の集合より成り其用（ハタラキ）（作用）九個の異なる營爲の集合より成る。要約せば大氣の化學的成分は窒素（六白金氣）酸素（三碧木氣）アルゴン（五黃土氣）ネオン（八白土氣）ヘリウム（九紫火氣）クリプトン（九紫火氣）クセノン（二黑土氣）の他尙三種の氣體を追加するを要し各成分の容量割合も亦均等たるものとす。

大氣原子の體及用の詳細に就いては講堂の口傳に讓ると雖も宇宙に存する現實に於ける一切象形の體及用は單に大氣原子の體及用を大衍（ヒヤクバ）せるものに過ぎず。

而して大氣原子の用（ハタラキ）に祐尅の二作用あり。萬物祐氣を稟（ウ）くる時は生加して有（ウ）を見るに至れども若し尅氣を稟くる時は減滅（ノゲリ）して遂に無（ム）に歸すに至るべし。

人の本命の氣に同會する祐氣の運は之を幸運と稱し尅氣の運（メグリ）は之を凶運と稱す。人生の災禍、貧窮、病患の凶運に苦惱するも或は亦之が福慶、富貴健康の幸運に歡喜するも唯呼吸大氣の祐尅如何に據つて決す。されば自己の呼吸する大氣の祐尅を知らざる者は自己の運命の去就を知らず自己の生存の長短を知らざるなり。人の運命と呼吸大氣の祐尅如何豈懼る可く撰ぶ可きに非ずや。此の宇宙大氣原子に關する新學術を氣學と謂ふ。

天祐助成株式會社　本社

天祐助成株式會社設立趣意書

神武天皇は建國の御詔勅に『宮室を地上に建てゝ宇と爲し以て八紘を統ぶ』と宣せられ聖德太子は宇宙眞理の實現は『大氣を祐樗相に保存する堂塔伽藍の造營に在り』と神慮せられて我が天照大神の垂示し賜へる八咫哲學（八咫鏡の用（ハタラキ）を謂ひ氣學とす）の眞理を顯彰し賜ひ以て千古を貫く皇運の天壤無窮を確保し賜ふと共に國民にも亦其處世の要諦を敎導し賜へり然るに今や舉世斯る尊嚴確固たる我が神代より傳承し來れる人生處世の要諦を全く知らず之を輕視無視して顧みず徒らに歐米文化の模倣を謳歌し終に現今の如く文化開けて人反つて生きるに苦しむの不幸を唱つに至れるを見る誠に遺憾に堪へざるなり抑々歐米の文化は現在の誇張を重んじ我國固有の文化は未來の永生を尊ぶものにして凡そ未來を樂むものは榮へ現在を喜ぶものは滅ぶ可く人類をして最大且最强に未來を樂ましめ人生の歡喜を感ぜしむるは則ち釋尊も說ける涅槃の生活、永生の生活にして我が八咫哲學の明示し賜ふ處なり。則ち之を方法的に述ぶれば人の天祐禀受の唯一具器たる祐樗相の住家を建設し之に永居して子孫に傳承するに在る而已

今回吾等同志は此處に鑑み天照大神の垂示し賜へる八咫哲學に遵據し人に其住家の祐樗相を建設せしめ以て處世の安易、人生の怡樂を把握せしめんとす。之れ本會社の設立を見る所以也

天祐助成株式會社

本社　靜岡縣熱海町伊豆山八丁畑二七三（電話熱海三三四五番）

營業所　東京市日本橋區江戸橋一ノ九（電話日本橋二八一八番）

支店　群馬縣利根郡水上村大字湯原字諏訪原七二七

取締役社長　田中胎東

專務取締役　加久田清正

取締役　古川國康　社員　相羽芳雄

取締役　中井半三郎　社員　久保田忠孝

取締役　小菅增太郎　社員　赤松貫二

監査役　本多惠治　社員　立石彌平次

監査役　端文治郎　社員　友成淑夫

監査役　押原實

氣學寸感（一）

現象の生因

凡そ人の處世の苦は貧と病との二より發す。貧を防ぎ病を避け人各々其享保せる天德の全能を發揮して其生を樂しむを得ば現世即ち實相の淨土たり。

政治の要諦も宗教の存立も科學の目的も究極一に此の人生淨土の實現に歸す。而して之が實現の對策として法律の制定、行政の實施、教化の設備、社會事業の施設等あり、指導の懇切、匡救の盡力、保護の普及全きを期すと雖も、尙ほ巷に失業を憂ひ室に病患を呪ふ聲あるを聞く。

文化開けて人、反つて生きるに苦しむとは何ぞや。之れ世の人、貧の現象、病の現象そのものを知つて未だ現象の生因を知らず即ち自己に映感せる現象の実實のみを知つて未だ自己に映感せざる現象の本元を知らざるなり。既に現象の成因を知らず焉ぞ之が実實に對する良策を得んや。今やヘーゲル氏の現象に關する新論理科學を基礎として立論せるマルクス氏の經濟論を聽くと雖も其論說は宇宙先天の方則に乖離せるを知らざるものなるが故に其學說の實際化實用化は全く至難にして單に人を毒するのみ。

氣學は現象の成因本元たる宇宙大氣原子に關する新自然科學にして彼の老子の唱導せる所謂「玄」の本體たり即ち人に現象の成因本元たる宇宙大氣の善用を敎へ以て人の處世に於ける貧病を始め一切の災厄を芟除し人に其天德の豐有を圖らしめて之が実實たる福慶の現象を稟與招來せしむるものとす。

人よ徒に他人の富貴を批羨するを罷めて退いて先づ自己の天德の改善累積に精進せよ。

（九氣現象學）

○自昭和十二年二月五日子ノ刻至仝十三年二月四日亥ノ刻　壹ヶ年間宇宙運行の大氣原子內に於ける九個の氣體粒子の機能及其所在方位は左の如し

中央……九紫火氣
乾方……一白水氣
西方……二黑土氣
艮方……三碧木氣　大歲氣
南方……四綠木氣　暗劔殺氣
北方……五黃土氣　土殺氣
坤方……六白金氣　歲破氣
東方……七赤金氣
巽方……八白土氣

○各性の祐尅氣所在方位年別表

抑々人の天運は禍福の現象と爲りて人に映感せしむるに、一線の氣より四線の幾七線の象、十線の形に至る期間を要す。則ち月にして四ヶ月、七ヶ月、十ヶ月、年にして四年七年十年の歳月を經るを要す。人の現在に於ける苦樂、禍福は凡て過去に於ける其身體の無意識に呼吸、吸入蓄保せる宇宙大氣の祐尅作用に發端生因するものとす。されば凶を避け吉を彊めんと欲せば平常より祐氣を用ひて之を蓄保し、將來吉運の招來に專念すべし。今本年に於ける各人、本命性に對する大氣祐尅の所在方位を掲示すれば左表の如し。

一、各自の生年を以て其本命性を知り現在の住居を太極(中心)として方位を別つ可し。
但十八歳以下の者は其生月を以て本命性を定む。

一、尅氣本命を用ふる時は其効應の定時に於て死亡するに至る可く的殺を用ふる時は失敗するに至る可し。

一、祐氣實用の方法に七種あり内最も實施の簡易なるは自家内に於ける寢所の移動とす。

一、人の喜怒哀樂の感情を起し或は成功及失敗の禍福を演ずるは皆自己の周圍に於ける他人の自己に爲さしむる處たり(親子、夫婦、兄弟と雖も自己の身體と大氣を別個に保有せる者は天地より見て皆之を他人と謂ふ)されば人の處世の善惡如何は自己と其周圍に於ける他人との連繫作用の得失如何に據つて定まる。祐氣を用ひたる人には其周圍の他人皆自己に慶幸の作用を與へ尅氣を用ひたる人には皆之に反す。

祐氣所在方位

本命性別＼大氣別	祐氣所在方位							
	生氣(大吉)	和氣(吉)	退氣(小吉)	劔殺氣(極凶)	五黃殺氣(極凶)	本命氣(極凶)	的殺氣(大凶)	死氣(大凶)
一白水性	東	—	艮	南	北	乾	巽	巽、西
二黑土性	—	巽	東	南	北	西	東	南、艮
三碧木性	乾	—	—	南	北	艮	坤	東、坤
四綠木性	乾	艮	—	南	北	南	北	東、坤
五黃土性	—	巽、西	東	南	北	北	南	南、艮
六白金性	巽、西	東	乾	南	北	坤	艮	中
七赤金性	巽、西	—	乾	南	北	東	西	中
八白土性	—	西	東	南	北	巽	乾	南、艮
九紫火性	艮	—	巽、西	南	北	中	—	乾

○各性の祐氣所在方位月別表

一、年盤の祐尅は前表參照

一、祐氣の多き月は天運的に行動自由なる時期とす。

月別	位方	氣九	一白水性	二黑土性	三碧木性	四綠木性	五黃土性	六白金性	七赤金性	八白土性	九紫火性
正月節	東	三	巽	南	巽	東	南	西	艮	西	東
	巽	四	西	西	南	南	西	南	乾	乾	巽
	乾	三	七	七	北	北	乾	艮		南	艮
			六	六			北	北			
二月節	艮	九		七	九	三	七	西	東	七	東
	南	九		九	一	一	九	七	八	六	八
	北			八	八	九	八	一	二	九	四
	南			七	九	九	七	八	八	七	三
三月節	坤	九	南	坤	坤	坤	坤	巽	巽	巽	東
	北	九	七	九	九	九	八	北	南	坤	北
	南	九		六			九	巽	巽	艮	巽
	艮			七			八	艮	北	巽	北
	巽			八			七	南	巽	艮	巽
	坤			九			六	七	八	九	二
四月節	南	九	西	東	西	巽	東	巽	巽	東	東
	北	九	北	北	東	一	北			北	北
	東	九	南	南			南			南	南
	西			東			東			東	西
	北			北			北			北	北
	南			南			南			南	南
五月節	艮	九	西	坤	巽	西	東	坤	乾	坤	東
	坤	九	坤	東	艮	巽	巽	乾	東	乾	西
	東		西		西		坤	東		巽	艮
	艮						乾				
	東						巽				
	西						東				
六月節	東	九	坤	巽	乾	乾	東	東	巽	西	巽
	坤	九	六	六	一	一	巽	西	乾	東	西
	巽		七	八			坤	乾	坤	坤	坤
	東						巽	東	巽	西	東
	巽						東	巽	乾	東	巽
	西						西	西	坤	坤	西
七月節	巽	九	巽	巽	西	西	巽	東	巽	東	東
	東	九	北	東	乾	乾	東	巽	西	巽	巽
	巽		南	巽			巽	乾	東	乾	乾
	北						乾	巽	巽	巽	巽
	南						巽	東	乾	東	東
	巽						東		巽	巽	巽
八月節	巽	九	北	巽	艮	北	南	艮	南	南	北
	乾	九	巽	乾	坤	艮	乾	北	艮	艮	南
	巽		三	八	一	三	巽	南	乾	北	北
	六		六	六	四		二	乾	巽	南	乾
							八	巽	巽	乾	巽
							六	艮	艮	巽	艮
九月節	坤	九	坤	西	坤	南	西	北	南	北	北
	東	九	東	艮	艮	艮	北	南	北	艮	東
	艮		艮		東	坤	艮	西		南	西
	坤						西			北	北
	東						北			南	南
	西						艮			東	西
十月節	東	九	乾	乾	北	北	乾	北	南	南	艮
	西	九	西	西	南	南	西	南	北	乾	坤
	南		南	南		東	南	乾	乾	西	北
	乾		乾	乾			乾	西	艮	南	乾
	西		東	東			西	南	坤	乾	西
	東						東	乾	北	艮	東
十一月節	西	九	東	北	北	北	北	東	東	艮	東
	六	九		艮	坤	坤	艮	西	西	西	西
				七	一	一	坤	東		東	東
				九	九	九	北	北		北	北
				七	七	七	艮	艮		艮	艮
				六	六	六	西	西		西	西
				二	二	二	東	東		東	東
十二月節	南	九	南	北	乾		北	北	艮	艮	北
	乾	九	乾	南			南	南	巽	巽	乾
	艮		艮	艮			巽	巽			巽
							北	北			艮
							南	南			南
							巽	巽			巽
							艮	艮			艮

大氣は人を教育する

假令親や他人が何を教へずとも幼兒は其發育につれて先天的に智能が發一するものである。即ち人は改めて何等の人爲的教育を受けずとも滿十八歳に達すれば天然的に自己の生存保持に必要なる智能丈けは必ず一通り（八種の智能）具備するものである。

然らば何が此の智能の獲得を爲さしむるのであるか　周圍の環境か否、日常の經驗か否、呼吸する宇宙の大氣が人體保氣の一極に同會して教へるのである。之を動物に就いて見ても彼の燕が所を違へず飛去り飛來り龜が自分の產卵した場所に一定の孵化日數を待つてチヤント子供を迎ひに來るが如きは全く他動的に教へられた結果ではない。彼等は磁石なくして方角を知り時計曆なくして時日の經過を精確に知つて居るのである。斯くの如く人や動物の體が保有して居る大氣一極の微妙なる用（ハタラキ）を本能と謂つて居る。

眞の教育は人の本能に立脚した教育でなくてはならない。約言すれば本能教育でなくてはならない。本能を矯める所に現代教育の矛盾や缺陷が存するのである。本能教育に於ては宇宙の大氣そのものが教育の作用を爲すのであつて人の教育者は單に之が補助を爲すに過ぎない。換言すれば本能教育とは取りも直さず宇宙の大氣教育なのである。

しかし宇宙の大氣には人にとり祐氣と尅氣とがあつて祐氣を呼吸保有する人は自己の生存に對し善き本能が與へられ尅氣を呼吸保有する人は惡き本能が與へられる。善き本能を與へられたる者は唯歳月の經過さへ待てば其の儘にして天才賢人と成り得るのである。

如何に人爲の學校教育を盡くしても天爲の大氣教育を無視しては斷じて處世上幸福なる生涯を果すことが出來ない。學校は卒へたが職がない。學校は出たが出世しない。學校は良く出來たが緣談が惡い等と云ふ現象は皆此の大氣教育を善く受けない結果である。

學校教育は人の社會的教育であつて大氣教育は人の生存的教育である。學校教育は他動的、人爲的であるが大氣教育は主動的天爲的である。

今や學校教育以外に人の生存上より重要緊密なる大氣教育の全く閑却放置せられて居た事が始めて發見せられたのである。

教育とは兒童を山の麓に連れて行つて春風に吹かれさすことだ。

（大氣現教育學）　孔子

○各性の大氣同會月別（氣學年度）

一、人の意志は人体の保有する大氣の一極即ち人の本命性に宇宙大氣の同會せる結果發生するものにして大氣同會作用、年月日時の變化に從ひ人の心境は常に他動的に變化すべし。

一、祐氣の同會は心境良化し、尅氣の同會は心境惡化す、詳細は心理氣學に就いて知るべし。

一、本命年盤の同會は自然の成行を示し本命月盤の同會は自己の意志を示す。同會の作用に依る祐尅吉凶の如何は氣學入門を參照すべし。

一、記号略字「ア」は暗劒殺氣・年盤「破」は月破氣、月盤「破」は歲破氣とす。

性別	月別	正月節		二月節		三月節		四月節		五月節		六月節		七月節		八月節		九月節		十月節		十一月節		十二月節	
別命本 / 現治在		位方	氣九	位方	氣九	位方	氣九	位方	氣九	位方	氣九	位方	氣九	位方	氣九	位方	氣九	位方	氣九	位方	氣九	位方	氣九	位方	氣九
一白水性	年盤	乾	六	乾	五	乾	四破	乾	三破	乾	二	乾	一	乾	九	乾	八	乾	七ア	乾	六	乾	五	乾	四
	月盤	北	五	坤	六破	東	七	巽	八	中	九	乾	一	西	二	艮	三	南	四ア	北	五	坤	六ア	東	七
二黑土性	年盤	西	七	西	六破	西	五	西	四	西	三	西	二	西	一	西	九ア	西	八	西	七	西	六	西	五
	月盤	坤	六破	東	七	巽	八	中	九	乾	一	西	二	艮	三	南	四ア	北	五	坤	六破	東	七	巽	八
三碧木性	年盤	艮	八	艮	七	艮	六	艮	五	艮	四	艮	三破	艮	二ア	艮	一	艮	九	艮	八	艮	七	艮	六
	月盤	東	七	巽	八	中	九	乾	一	西	二	艮	三	南	四ア	北	五	坤	六破	東	七	巽	八	中	九
四綠木性	年盤	南	九	南	八	南	七	南	六	南	五	南	四ア	南	一	南	二	南	一	南	九	南	八破	南	七
	月盤	巽	八	中	九	乾	一	西	二	艮	三	南	四ア	北	五	坤	六破	東	七	巽	八	中	九	乾	一
五黃土性	年盤	北	一	北	九	北	八	北	七	北	六ア	北	五	北	四	北	三	北	二	北	一	北	九	北	八
	月盤	中	九	乾	一	西	二	艮	三	南	四ア	北	五	坤	六破	東	七	巽	八	中	九	乾	一	西	二
六白金性	年盤	坤	二破	坤	一	坤	九	坤	八ア	坤	七	坤	六	坤	五	坤	四	坤	三	坤	二	坤	一	坤	九破
	月盤	乾	一	西	二	艮	三	南	四ア	北	五	坤	六破	東	七	巽	八	中	九	乾	一	西	二	艮	三
七赤金性	年盤	東	三	東	二	東	一ア	東	九	東	八	東	七	東	六	東	五破	東	四	東	三	東	二	東	一
	月盤	西	二	艮	三	南	四ア	北	五	坤	六破	東	七	巽	八	中	九	乾	一	西	二	艮	三	南	四ア
八白土性	年盤	巽	四	巽	三ア	巽	二	巽	一	巽	九	巽	八	巽	七	巽	六	巽	五破	巽	四破	巽	三ア	巽	二
	月盤	艮	三	南	四ア	北	五	坤	六破	東	七	巽	八	中	九	乾	一	西	二	艮	三	南	四ア	北	五
九紫火性	年盤	中	五	中	四	中	三	中	二	中	一	中	九	中	八	中	七	中	六	中	五	中	四	中	三
	月盤	南	四ア	北	五	坤	六破	東	七	巽	八	中	九	乾	一	西	二	艮	三	南	四ア	北	五	坤	六破

○各性の大氣對中月別（氣學年度）

一、對中は人の意思の目標方向を示す。年盤は一ヶ年間、月盤は一ヶ月間の期間其作用を爲す。
同會は具體的に現象の接受を見るも對中は意識的に唯想像するのみ。

一、對中の哲理は人に坐して千里の外を知察先見する能を與ふ。詳細は九氣密意を參照せらるべし。

盤別 / 期間 / 性別	年盤	月盤											
	全年	正月節		二月節		三月節		四月節		五月節		六月節	
治在	方位	方位		方位		方位		方位		方位		方位	
別	九氣	九氣		九氣		九氣		九氣		九氣		九氣	
一白水性	巽	南	八	艮	七	西	五	乾	三	—	—	巽	八
二黑土性	東	艮	七	西	六破	乾	四破	—	—	巽	九	東	七
三碧木性	坤 六破	西	七	乾	五	—	—	巽	一	東	八	坤	六
四綠木性	北	乾	六	—	—	巽	二	東	九	坤	七	北	五
五黃土性	南 四ア	—	—	巽	三ア	東	一ア	坤	八ア	北	六ア	南	四ア
六白金性	艮	巽	四	東	二	坤	九	北	七	南	五	艮	三破
七赤金性	西	東	三	坤	一	北	八	南	六	艮	四	西	二
八白土性	乾	坤 二破	一	北	九	南	七	艮	五	西	三	乾	二
九紫火性	—	北	一	南	八	艮	六	西	四	乾	二	—	—

盤別 / 期間 / 性別	月盤												
	七月節		八月節		九月節		十月節		十一月節		十二月節		
治在	方位		方位		方位		方位		方位		方位		
別	九氣		九氣		九氣		九氣		九氣		九氣		
一白水性	東	六	坤	四	北	二	南	九	艮	七	西	五	
二黑土性	坤	五	北	三	南	一	艮	八	西	六	乾	四	
三碧木性	北	四	南	二	艮	九	西	七	乾	五	—	—	
四綠木性	南	三	艮	一	西	八	乾	六	—	—	巽	二	
五黃土性	艮	二ア	西	九ア	乾	七ア	—	—	巽	三ア	東	一ア	
六白金性	西	一	乾	八	—	—	巽 四破		東	二	坤	九破	
七赤金性	乾	九	—	—	巽	五	東	三	坤	一	北	八	
八白土性	巽	—	巽	六	東	四	坤	二	北	九	南	七	
九紫火性	東	五	坤	三	北	一	南 八破		艮	六	艮	六	

○天地の節替と大氣の變化

一、節替日の前後は先天的に天候或は氣候變化す。左表下、天候變化記入欄へ書入れ置きて將來實驗の參考とせらるべし。

一、四才以下の幼兒、月建方へ移居する時は死亡す。

一、住家の月建方へ胞衣を埋納すべからず。

一、交渉、轉居等に月破方を用ふべからず。

一、天干と地支相尅する月は氣候不順、天候異常なるべし。

一、凡て天の氣候の變化は一ヶ月遲れて地の氣候の變化となりて現はる。（直線の哲理）

節名	太陽曆期間	節替日	氣層別大氣原子の中核 天干	九氣	地支	月建方	月破方	節替、天候變化記入欄
立春、雨水	自二月五日至三月六日	二月五日	水壬氣	五黃土氣	寅火生氣	寅の方東北方	申の方南西方	
啓蟄、春分	自三月七日至四月六日	三月七日	水癸氣	四綠木氣	卯木旺氣	卯の方東方	酉の方西方	
清明、穀雨	自四月七日至五月六日	四月七日	木甲氣	三碧木氣	辰水墓氣	辰の方東南方	戌の方西北方	
立夏、小滿	自五月七日至六月七日	五月七日	木乙氣	二黑土氣	巳金生氣	巳の方南東方	亥の方北西方	
芒種、夏至	自六月八日至七月八日	六月八日	火丙氣	一白水氣	午火旺氣	午の方南方	子の方北方	
小暑、大暑	自七月九日至八月八日	七月九日	火丁氣	九紫火氣	未木墓氣	未の方南西方	丑の方北東方	
立秋、處暑	自八月九日至九月九日	八月九日	土戊氣	八白土氣	申水生氣	申の方西南方	寅の方東北方	
白露、秋分	自九月十日至十月八日	九月十日	土己氣	七赤金氣	酉金旺氣	酉の方西方	卯の方東方	
寒露、霜降	自十月九日至十一月八日	十月九日	金庚氣	六白金氣	戌火墓氣	戌の方西北方	辰の方東南方	
立冬、小雪	自十一月九日至十二月八日	十一月九日	金辛氣	五黃土氣	亥木生氣	亥の方北西方	巳の方南東方	
大雪、冬至	自十二月九日至一月六日	十二月九日	水壬氣	四綠木氣	子水旺氣	子の方北方	午の方南方	
小寒、大寒	自一月七日至二月四日	一月七日	水癸氣	三碧木氣	丑金墓氣	丑の方北東方	未の方南西方	

○昭和十二年 **日の氣粒表**（氣學年度）

略字 一、一白水氣 二、二黑土氣 三、三碧木氣 以下之ニ準ス

一、現在世界の採用しつゝあるグレゴリ暦（太陽暦）は大氣運行の實際と暦との間に毎年付約八秒六四の差を生ず。されば時折氣學對中及同會の兩哲理を應用し以て大氣運の際を測り或は節替り日前後に於ける天候の變化を以て其正鵠を確む可し。

一、氣學年度とは其年により一日前後の差ありと雖も二月五日子の刻より翌年二月四日までを滿一年と爲し且又一年を二十四氣節に分つを謂ふ。

一、四月甲子九紫の日より、十月癸亥一白の日までを陰遁と爲し、十月甲子一白の日より四月癸亥九紫の日までを陽遁と爲す。地球は太陽に對し二十三度二十七分四十四秒を爲すが故に其自轉及公轉作用の結果は夜の長き日の時期と晝の長き日の時期となり則ち九紫、八白、七赤、六白、と陰遁する日の時期と一白、二黑、三碧、四綠、と陽遁する時期との二に分るゝものとす。

一、大氣を構成する大氣原子は人の肉眼に映ぜず人の感能に感ぜずと雖も年月日時に流して變ずる左表干支月盤内は月の大氣原子の變化を示し日別内は日の大氣原子の變化又節名内は氣候の態樣を表せり。

一、人の生年の天干及其六ッ目の天干巡り來る時は直線の哲理に據り氣が變る即ち其人の變化を起し其人の心氣更改すべし。例へば甲歲生れの人ならば甲及其六ッ目の天干の月、日巡り來る時は其精神に變化を生ず。左表を用ひて人の精神の變化する時期自己の心氣更改する時節を知るべし。

一、大氣は節と系とを作りて流動輪廻す即ち九氣に一四七、九六三、二五八の三節三系地支に子卯午酉、丑辰未戌、寅巳申亥の四節三系あり。左表を以て線路の哲理を活世一切の交渉の調談に、事業の完成に、病氣の治療に、之を實施すべし。

節名	日別	干支月盤	太陽暦月名																												
立春、雨水	一日	壬寅（ミヅノエトラ）五黃	貳月	參月	參月	四月	四月	五月	五月	六月	六月	七月	七月																		
啓蟄、春分	二日	癸卯（ミヅノトウ）四綠	丁亥九	戊午四	戊子三	己未八	己丑五																								
清明、穀雨	三日	甲辰（キノエタツ）三碧	戊子一	己未五	己丑二	庚申七	庚寅四																								
立夏、小滿	四日	乙巳（キノトミ）二黑	己丑二	庚申六	庚寅一	辛酉八	辛卯五																								
芒種、夏至	五日	丙午（ヒノヘウマ）一白	庚寅三	辛酉七	辛卯四	壬戌九	壬辰六																								
小暑、	六日	丁未（ヒノトヒツジ）	辛卯四	壬戌八	壬辰五	癸亥一	癸巳二																								
	七日		壬辰五	癸亥九	癸巳三	甲子九（陰遁始）	甲午八	乙丑七	乙未六	丙寅五	丙申四	丁卯三	丁酉二	戊辰一	戊戌九	己巳八	己亥七	庚午六	庚子五	辛未四	辛丑三	壬申二	壬寅一	癸酉九	癸卯八	甲戌七	甲辰六	乙亥五	乙巳四	丙子三
	八日		癸巳四	甲子十	甲午九	乙丑八	乙未七	丙寅六	丙申五	丁卯四	丁酉三	戊辰二	戊戌一	己巳九	己亥八	庚午七	庚子六	辛未五	辛丑四	壬申三	壬寅二	癸酉一	癸卯九	甲戌八	甲辰七	乙亥六	乙巳五	丙子四	丙午三
	九日		甲午五	乙丑一	乙未二	丙寅三	丙申四	丁卯五	丁酉六	戊辰七	戊戌八	己巳九	己亥十	庚午一	庚子二	辛未三	辛丑四	壬申五	壬寅六	癸酉七	癸卯八	甲戌九	甲辰十	乙亥一	乙巳二	丙子三	丙午四	丁丑五	丁未六	戊寅七
	十日		乙未六	丙寅七	丙申八	丁卯九	丁酉十	戊辰一	戊戌二	己巳三	己亥四	庚午五	庚子六	辛未七	辛丑八	壬申九	壬寅十	癸酉一	癸卯二	甲戌三	甲辰四	乙亥五	乙巳六	丙子七	丙午八	丁丑九	丁未十	戊寅一	戊申二	己卯三
	十一日		丙申七	丁卯八	丁酉九	戊辰十	戊戌一	己巳二	己亥三	庚午四	庚子五	辛未六	辛丑七	壬申八	壬寅九	癸酉十	癸卯一	甲戌二	甲辰三	乙亥四	乙巳五	丙子六	丙午七	丁丑八	丁未九	戊寅十	戊申一	己卯二	己酉三	庚辰四
	十二日		丁酉八	戊辰九	戊戌十	己巳一	己亥二	庚午三	庚子四	辛未五	辛丑六	壬申七	壬寅八	癸酉九	癸卯十	甲戌一	甲辰二	乙亥三	乙巳四	丙子五	丙午六	丁丑七	丁未八	戊寅九	戊申十	己卯一	己酉二	庚辰三	庚戌四	辛巳五
	十三日		戊戌七	己巳八	己亥九	庚午十	庚子一	辛未二	辛丑三	壬申四	壬寅五	癸酉六	癸卯七	甲戌八	甲辰九	乙亥十	乙巳一	丙子二	丙午三	丁丑四	丁未五	戊寅六	戊申七	己卯八	己酉九	庚辰十	庚戌一	辛巳二	辛亥三	壬午四
	十四日		己巳四	庚午五	庚子六	辛未七	辛丑八	壬申九	壬寅十	癸酉一	癸卯二	甲戌三	甲辰四	乙亥五	乙巳六	丙子七	丙午八	丁丑九	丁未十	戊寅一	戊申二	己卯三	己酉四	庚辰五	庚戌六	辛巳七	辛亥八	壬午九	壬子一	癸未二
	十五日		庚午一	辛未二	辛丑三	壬申四	壬寅五	癸酉六	癸卯七	甲戌八	甲辰九	乙亥十	乙巳一	丙子二	丙午三	丁丑四	丁未五	戊寅六	戊申七	己卯八	己酉九	庚辰十	庚戌一	辛巳二	辛亥三	壬午四	壬子五	癸未六	癸丑七	甲申八
	十六日		辛未三	壬申四	壬寅五	癸酉六	癸卯七	甲戌八	甲辰九	乙亥十	乙巳一	丙子二	丙午三	丁丑四	丁未五	戊寅六	戊申七	己卯八	己酉九	庚辰十	庚戌一	辛巳二	辛亥三	壬午四	壬子五	癸未六	癸丑七	甲申八	甲寅九	乙卯十
	十七日		壬申五	癸酉六	癸卯七	甲戌八	甲辰九	乙亥十	乙巳一	丙子二	丙午三	丁丑四	丁未五	戊寅六	戊申七	己卯八	己酉九	庚辰十	庚戌一	辛巳二	辛亥三	壬午四	壬子五	癸未六	癸丑七	甲申八	甲寅九	乙卯十	乙酉一	丙辰二
	十八日		癸酉七	甲戌八	甲辰九	乙亥十	乙巳一	丙子二	丙午三	丁丑四	丁未五	戊寅六	戊申七	己卯八	己酉九	庚辰十	庚戌一	辛巳二	辛亥三	壬午四	壬子五	癸未六	癸丑七	甲申八	甲寅九	乙卯十	乙酉一	丙辰二	丙戌三	丁巳四
	十九日		甲戌九	乙亥十	乙巳一	丙子二	丙午三	丁丑四	丁未五	戊寅六	戊申七	己卯八	己酉九	庚辰十	庚戌一	辛巳二	辛亥三	壬午四	壬子五	癸未六	癸丑七	甲申八	甲寅九	乙卯十	乙酉一	丙辰二	丙戌三	丁巳四	丁亥五	戊午六
	二十日		乙亥一	丙子二	丙午三	丁丑四	丁未五	戊寅六	戊申七	己卯八	己酉九	庚辰十	庚戌一	辛巳二	辛亥三	壬午四	壬子五	癸未六	癸丑七	甲申八	甲寅九	乙卯十	乙酉一	丙辰二	丙戌三	丁巳四	丁亥五	戊午六	戊子七	己未八
	二十一日		乙巳二	丙子三	丙午四	丁丑五	丁未六	戊寅七	戊申八	己卯九	己酉十	庚辰一	庚戌二	辛巳三	辛亥四	壬午五	壬子六	癸未七	癸丑八	甲申九	甲寅十	乙卯一	乙酉二	丙辰三	丙戌四	丁巳五	丁亥六	戊午七	戊子八	己未九
	二十二日		丙子三	丙午四	丁丑五	丁未六	戊寅七	戊申八	己卯九	己酉十	庚辰一	庚戌二	辛巳三	辛亥四	壬午五	壬子六	癸未七	癸丑八	甲申九	甲寅十	乙卯一	乙酉二	丙辰三	丙戌四	丁巳五	丁亥六	戊午七	戊子八	己未九	己丑十
	二十三日		丙午五	丁丑六	丁未七	戊寅八	戊申九	己卯十	己酉一	庚辰二	庚戌三	辛巳四	辛亥五	壬午六	壬子七	癸未八	癸丑九	甲申十	甲寅一	乙卯二	乙酉三	丙辰四	丙戌五	丁巳六	丁亥七	戊午八	戊子九	己未十	己丑一	庚申二
	二十四日		丁丑七	丁未八	戊寅九	戊申十	己卯一	己酉二	庚辰三	庚戌四	辛巳五	辛亥六	壬午七	壬子八	癸未九	癸丑十	甲申一	甲寅二	乙卯三	乙酉四	丙辰五	丙戌六	丁巳七	丁亥八	戊午九	戊子十	己未一	己丑二	庚申三	辛酉四
	二十五日		戊寅八	戊申九	己卯十	己酉一	庚辰二	庚戌三	辛巳四	辛亥五	壬午六	壬子七	癸未八	癸丑九	甲申十	甲寅一	乙卯二	乙酉三	丙辰四	丙戌五	丁巳六	丁亥七	戊午八	戊子九	己未十	己丑一	庚申二	辛酉三	辛亥四	壬子五
	二十六日		己卯九	己酉十	庚辰一	庚戌二	辛巳三	辛亥四	壬午五	壬子六	癸未七	癸丑八	甲申九	甲寅十	乙卯一	乙酉二	丙辰三	丙戌四	丁巳五	丁亥六	戊午七	戊子八	己未九	己丑十	庚申一	辛酉二	辛亥三	壬子四	癸未五	癸丑六
	二十七日		己酉十	庚辰一	庚戌二	辛巳三	辛亥四	壬午五	壬子六	癸未七	癸丑八	甲申九	甲寅十	乙卯一	乙酉二	丙辰三	丙戌四	丁巳五	丁亥六	戊午七	戊子八	己未九	己丑十	庚申一	辛酉二	辛亥三	壬子四	癸未五	癸丑六	甲申七
	二十八日		庚辰二	庚戌三	辛巳四	辛亥五	壬午六	壬子七	癸未八	癸丑九	甲申十	甲寅一	乙卯二	乙酉三	丙辰四	丙戌五	丁巳六	丁亥七	戊午八	戊子九	己未十	己丑一	庚申二	辛酉三	辛亥四	壬子五	癸未六	癸丑七	甲申八	甲寅九
	二十九日		辛巳五	辛亥六	壬午七	壬子八	癸未九	癸丑十	甲申一	甲寅二	乙卯三	乙酉四	丙辰五	丙戌六	丁巳七	丁亥八	戊午九	戊子十	己未一	己丑二	庚申三	辛酉四	辛亥五	壬子六	癸未七	癸丑八	甲申九	甲寅十	乙卯一	乙酉二
	三十日		壬午六	壬子七	癸未八	癸丑九	甲申十	甲寅一	乙卯二	乙酉三	丙辰四	丙戌五	丁巳六	丁亥七	戊午八	戊子九	己未十	己丑一	庚申二	辛酉三	辛亥四	壬子五	癸未六	癸丑七	甲申八	甲寅九	乙卯十	乙酉一	丙辰二	丙戌三
	三十一日		癸未七		癸丑八		甲寅九		乙酉十		丙戌一		丁巳二		戊午三		己未四		庚申五		辛酉六		壬子七		癸未八		甲寅九		乙卯十	

生氣三八三碧木氣以下之ニ準ズ

實際と暦との間に毎年一年に一日を應用し以て大氣運行の實を確む可し。

の刻より翌年二月四日亥の刻

、十月甲子一白の日より翌年二度二十七分四十四秒の傾斜實の長き日の時期とを生ず。

、三碧、四綠、と陽遁する日のず と雖も年月日時に流動輪回ほ日の大氣原子の變化を示す

、據り氣が變る即ち其人の精神甲ノヘ及其六ツ目の天干即ち己ツチノトの精神の變化する時期を察し

、二五八の三節三系あり、を以て線路の哲理を活應し處實施すべし。

二月	壹月	壹月	十二月	十二月	十一月	十一月	十月	十月	九月	九月	八月	八月	七月	七月	六月
立春、大寒	小寒、大雪	大雪、冬至	小雪、立冬	立冬、小雪	寒露、霜降	霜降、立寒	白露、秋分	秋分、寒露	處暑、白露	白露、秋分	立秋、處暑	小暑、大暑	夏至、小暑	夏至、小暑	芒種、夏至
癸丑 三碧	壬子 四綠	壬子 四綠	辛亥 五黃	辛亥 五黃	庚戌 六白	庚戌 六白	己酉 七赤	己酉 七赤	戊申 八白	戊申 八白	丁未 九紫	丁未 九紫	丙午 一白	丙午 一白	乙巳 二黑
甲子四	癸亥三	壬戌二	壬戌五	壬辰二	辛酉三	辛卯六	庚申一	庚寅四	己丑五	己未八	戊子九	戊午六	丁亥七	丁巳四	丙辰五
乙丑五	甲午一	癸亥六	癸巳九	癸巳二	壬戌二	壬辰五	辛酉六	辛卯三	庚寅一	庚申七	己丑八	己未五	戊子二	戊午六	丁亥七
丙寅六	乙未二	甲子七	甲午四	甲午一	癸巳三	癸亥四	壬辰二	壬戌五	辛卯八	辛酉九	庚寅四	庚申一	己丑五	己未八	戊子九
丁卯七	丙申八	乙丑二	乙未五	甲子一（陽遁始）	甲子一	癸亥一	壬辰二	壬戌五	辛卯八	辛酉九	庚寅四	庚申一	己丑五	己未八	戊子九
戊午一	丁酉九	丙寅四	丙寅九	丙寅三	乙丑二	乙未五	甲子六	甲午九	癸巳一	癸亥七	壬辰二	壬戌五	辛卯八	辛酉九	庚寅四
己未二	戊戌二	丁卯三	丁卯四	丁酉七	丙申六	丙寅一	乙未二	乙丑五	甲子六	甲午九	癸巳一	癸亥七	壬辰二	壬戌五	辛卯八
庚寅七	己丑八	戊子九	戊戌八	戊辰五	己亥九	己巳六	庚午七	庚子一	辛丑二	辛未五	壬申八	壬寅一	癸卯四	癸酉七	甲辰二
辛卯一	庚申四	己未五	己丑八	己未二	庚子一	庚午七	辛丑二	辛未五	壬申八	壬寅一	癸卯四	癸酉七	甲辰二	甲戌五	乙亥八
壬辰八	辛酉四	庚寅七	庚寅三	庚申六	辛未一	辛丑四	壬申七	壬寅一	癸卯四	癸酉七	甲辰二	甲戌五	乙亥八	乙丑一	丙子四
癸亥三	壬戌二	辛巳一	辛巳四	辛亥七	壬午二	壬子五	癸丑八	癸未二	甲申五	甲寅一	乙卯四	乙酉七	丙辰二	丙戌五	丁巳八
甲子四	癸亥三	壬戌二	壬戌五	壬辰二	辛酉三	辛卯六	庚申一	庚寅四	己丑五	己未八	戊子九	戊午六	丁亥七	丁巳四	丙辰五
乙丑五	甲午一	癸亥六	癸巳九	癸巳二	壬戌二	壬辰五	辛酉六	辛卯三	庚寅一	庚申七	己丑八	己未五	戊子二	戊午六	丁亥七
丙寅六	乙未二	甲子七	甲午四	甲午一	癸巳三	癸亥四	壬辰二	壬戌五	辛卯八	辛酉九	庚寅四	庚申一	己丑五	己未八	戊子九
丁卯七	丙申八	乙丑二	乙未五	甲子一（陽遁始）	甲子一	癸亥一	壬辰二	壬戌五	辛卯八	辛酉九	庚寅四	庚申一	己丑五	己未八	戊子九
戊午一	丁酉九	丙寅四	丙寅九	丙寅三	乙丑二	乙未五	甲子六	甲午九	癸巳一	癸亥七	壬辰二	壬戌五	辛卯八	辛酉九	庚寅四
己未二	戊戌二	丁卯三	丁卯四	丁酉七	丙申六	丙寅一	乙未二	乙丑五	甲子六	甲午九	癸巳一	癸亥七	壬辰二	壬戌五	辛卯八
庚寅七	己丑八	戊子九	戊戌八	戊辰五	己亥九	己巳六	庚午七	庚子一	辛丑二	辛未五	壬申八	壬寅一	癸卯四	癸酉七	甲辰二
辛卯一	庚申四	己未五	己丑八	己未二	庚子一	庚午七	辛丑二	辛未五	壬申八	壬寅一	癸卯四	癸酉七	甲辰二	甲戌五	乙亥八
壬辰八	辛酉四	庚寅七	庚寅三	庚申六	辛未一	辛丑四	壬申七	壬寅一	癸卯四	癸酉七	甲辰二	甲戌五	乙亥八	乙丑一	丙子四
癸亥三	壬戌二	辛巳一	辛巳四	辛亥七	壬午二	壬子五	癸丑八	癸未二	甲申五	甲寅一	乙卯四	乙酉七	丙辰二	丙戌五	丁巳八
甲子四	癸亥三	壬戌二	壬戌五	壬辰二	辛酉三	辛卯六	庚申一	庚寅四	己丑五	己未八	戊子九	戊午六	丁亥七	丁巳四	丙辰五
乙丑五	甲午一	癸亥六	癸巳九	癸巳二	壬戌二	壬辰五	辛酉六	辛卯三	庚寅一	庚申七	己丑八	己未五	戊子二	戊午六	丁亥七
丙寅六	乙未二	甲子七	甲午四	甲午一	癸巳三	癸亥四	壬辰二	壬戌五	辛卯八	辛酉九	庚寅四	庚申一	己丑五	己未八	戊子九
丁卯七	丙申八	乙丑二	乙未五	甲子一（陽遁始）	甲子一	癸亥一	壬辰二	壬戌五	辛卯八	辛酉九	庚寅四	庚申一	己丑五	己未八	戊子九
戊午一	丁酉九	丙寅四	丙寅九	丙寅三	乙丑二	乙未五	甲子六	甲午九	癸巳一	癸亥七	壬辰二	壬戌五	辛卯八	辛酉九	庚寅四
己未二	戊戌二	丁卯三	丁卯四	丁酉七	丙申六	丙寅一	乙未二	乙丑五	甲子六	甲午九	癸巳一	癸亥七	壬辰二	壬戌五	辛卯八
庚寅七	己丑八	戊子九	戊戌八	戊辰五	己亥九	己巳六	庚午七	庚子一	辛丑二	辛未五	壬申八	壬寅一	癸卯四	癸酉七	甲辰二
辛卯一	庚申四	己未五	己丑八	己未二	庚子一	庚午七	辛丑二	辛未五	壬申八	壬寅一	癸卯四	癸酉七	甲辰二	甲戌五	乙亥八
壬辰八	辛酉四	庚寅七	庚寅三	庚申六	辛未一	辛丑四	壬申七	壬寅一	癸卯四	癸酉七	甲辰二	甲戌五	乙亥八	乙丑一	丙子四
癸亥三	壬戌二	辛巳一	辛巳四	辛亥七	壬午二	壬子五	癸丑八	癸未二	甲申五	甲寅一	乙卯四	乙酉七	丙辰二	丙戌五	丁巳八

氣學寸感（三）

天德と慾得

人は慾張りさへすれば必ず與へられるものではない。慾張つて必ず與へられるには得る軌たる天德の作用を持つ必要がある。若し此の天德の作用を持たずして慾張り取ると其結果は一時良くとも必ず不幸の基となるものである。人生は慾の闘爭場とさへ見られるのであるからして人は皆得る軌たる天德を持つて之に臨まなければ徒らに隔靴搔痒の感に堪へないのみである。而して人の慾張る分量と其與へられる分量とは常に甚しき懸隔のあるのが普通である。之は人の慾に際限がないと云ふよりも寧ろ人の得る軌が弱い得る天德が稀薄だと云ふ點に歸着する元來人の與へられる分量は其得る軌たる天德の分量換言すれば祐氣の保有量に正比例するものである。故に大いに取らんとする者は大いに祐氣を用ひて天德の涵養累積を企圖せねばならない。

自己の得る軌たる天德の分量を超えて多く取ると縊死、謀、指彈を受け不當利得とか横領とか忌しい汚名を蒙せられるのである。しかし人が慾を出すと云ふ事は決して卑しい事ではない。人の慾の最初にして最貴なのを生存慾と云ふのであるが此の生存慾を出すのは最も大切な事である。唯人は自己の分を知つて自己の有する得る軌たる天德の分量を超へて慾を出さぬ事である。假令出しても與へられず返つて不幸を見るのみであるからして寧ろ得る軌たる天德の蓄積を圖つてあとは自然の成行に委ねる方が賢明である。

人は自ら慾張らずとも有する天德の分に應じて必ず天より與へられるものである。

（九氣經濟學）

八白土性	二十七、五十四、三十六、六十三、四十五、七十二	盛、旺	結婚、就職、信用つく、事の成就、處世の悅樂、儲かる
九紫火性	二十八、五十五、三十七、六十四、四十六、七十三	盛、極	現狀に倦怠、住居新增築の起念一家の創立、幸運に狎れて慢心生ず
一白水性	二十九、五十六、三十八、六十五、四十七、七十四	衰、初	投機に染手、過分の出金、偉大なる新希望新目的を發す、意張る、金錢の濫費、解決を急ぐ
二黑土性	二十一、四十八、三十、五十七、三十九、六十六	衰、沈	身體の衰弱、金を減らす、引退沈靜　口論　贅澤、消極的
三碧木性	二十二、四十九、三十一、五十八、四十、六十七	衰、變	身上の變化、家庭の改善、處世の改革、整理、相續爭ひ、親族不和
四綠木性	二十三、五十、三十二、五十九、四十一、六十八	衰、旺	夫婦の離婚、子女の死別、勤務の解雇、後援の斷絕、訴訟の興起
五黃土性	二十四、五十一、三十三、六十、四十二、六十九	衰、極	發病、貧苦(損失)、色情(放蕩)移居(家出)、悲觀(憂鬱)

○昭和十二年（氣學年度）に於ける各人、先天の運、略述すれば左の如し

一、左表の性別を知るに二月四日以前生れの人は前年生れに付其年齢に一歳を加算して見るべし。
一、人の天運は先天の運と後天の運との二より成る。
一、先天の運は生家の保有せる大氣（家相）の如何と生誕の際體内に稟有せる大氣（本命性）の如何に依つて定まり、後天の運は生後、移居動身により呼吸、吸入したる祐氣及尅氣の如何と滿四ヶ年以上在棲せる住家の保有せる大氣（家相）の如何に依つて決す。
一、人の天運は之を詳細に撿別すれば各性共祐尅合せて六萬千四百四十種の差異を有す。
一、左表は單に本命性別を以て遁甲の哲理に據る人の天運を掲示せり。
一、過去に於て祐氣を用ひたる人は其用ひたる量丈け其齎す種類の幸慶を左表に附加し尅氣を用ひたる人は其用ひたる量丈け其齎す種類の災禍を左表に附加す。
一、各自天運の詳細を知らんと欲せば氣學入門及九氣密意を參照すべし。

性別＼種目	年齢	天運略別	處世注意事項
六白金性	二十五、五十二 三十四、六十一 四十三、七十	盛、初	怠惰を棄て、忠實に働く、金は無いが身體で稼ぐ、人に盡くす、柔順誠實
七赤金性	二十六、五十三 三十五、六十二 四十四、七十一	盛、進	希望叶ふ、目的の途に進む、業務の繁忙、將來の好望、處世の樂觀
八白土性	二十七、五十四 三十六、六十三 四十五、七十二	盛、旺	結婚、就職、信用つく、事の成就、處世の悦樂、儲かる
九紫火性	二十八、五十五 三十七、六十四 四十六、七十三	盛、極	現狀に倦怠、住居新增築の起念一家の創立、幸運に狎れて慢心生す
一白水性	二十九、五十六 三十八、六十五 四十七、七十四	衰、初	投機に染手、過分の出金、偉大なる新希望新目的を發す、意張る、金錢の濫費、解決を急ぐ
二黑土性	二十一、四十八 三十、五十七 三十九、六十六	衰、沈	身體の衰弱、金を減らす、引退沈靜　口論　贅澤、消極的
三碧木性	二十二、四十九 三十一、五十八 四十、六十七	衰、變	身上の變化、家庭の改善、處世の改革、整理、相續爭ひ、親族不和
四綠木性	二十三、五十 三十二、五十九 四十一、六十八	衰、旺	夫婦の離婚、子女の死別、勤務の解雇、後援の斷絶、訴訟の興起
五黃土性	二十四、五十一 三十三、六十 四十二、六十九	衰、極	發病、貧苦（損失）、色情（放蕩）移居（家出）、悲觀（憂鬱）

○人の一生と先天、天運盛衰の時期

一、十九歳以下の人は生月を以て本命と爲すが故に之を除く。
一、男子の運は主として其業に女子の運は主として其縁に効應す。
一、未婚男子は左表天運の慶徳に浴せず。
一、既婚女子は其天運、主人の天運に左右せらるべし。
一、八種の天徳を豊有する祐構相に滿四ヶ年以上住居するものは左表を無視して常に盛陽の天徳を稟け之を子々孫々繼承すべし。
一、左表盛陽、衰陰時代の逆たる天運の人あるべし之を逆運と謂ひ、尅氣を稟くるに依り起る。
一、先天天運は氣學後天の作用方術を以て之を改變志得るものとす。

天運別 / 人性別 / 期間別 / 年齢別	初年の運			中年の運			晩年の運				
	三碧性	四綠性	九紫性	一白性	二黑性	五黃性	六白性	七赤性	八白性		
自二十歳二月廿十刻 至二十五歳二月廿亥刻	五ヶ年	胎養期	胎養期	胎養期	胎養期	胎養期	胎養期	胎養期	胎養期	胎養期	胎養期
自二十五歳同 至二十九歳同	四ヶ年	第一盛陽期	第一盛陽期	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上
自二十九歳同 至三十四歳同	五ヶ年	衰陰期	衰陰期	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上
自三十四歳同 至三十八歳同	四ヶ年	第二盛陽期	第二盛陽期	第一盛陽期	第一盛陽期	全上	全上	全上	全上	全上	全上
自三十八歳同 至四十三歳同	五ヶ年	衰陰期	衰陰期	衰陰期	衰陰期	全上	全上	全上	全上	全上	全上
自四十三歳同 至四十七歳同	四ヶ年	第三盛陽期	第三盛陽期	第二盛陽期	第二盛陽期	第一盛陽期	第一盛陽期	第一盛陽期	第一盛陽期	第一盛陽期	第一盛陽期
自四十七歳同 至五十二歳同	五ヶ年	衰陰期	衰陰期	衰陰期	衰陰期	衰陰期	衰陰期	衰陰期	衰陰期	衰陰期	衰陰期
自五十二歳同 至五十六歳同	四ヶ年	全上	全上	第三盛陽期	第三盛陽期	第二盛陽期	第二盛陽期	第二盛陽期	第二盛陽期	第二盛陽期	第二盛陽期
自五十六歳同 至六十一歳同	五ヶ年	全上	全上	衰陰期	衰陰期	衰陰期	衰陰期	衰陰期	衰陰期	衰陰期	衰陰期
自六十一歳同 至六十五歳同	四ヶ年	全上	全上	全上	全上	第三盛陽期	第三盛陽期	第三盛陽期	第三盛陽期	第三盛陽期	第三盛陽期
死亡ニ至ル迄	生涯	全上	全上	全上	全上	全上	衰陰期	衰陰期	衰陰期	衰陰期	衰陰期

特長なき者は食へない

働いて損をする。働いて猶且食へないとは何が故ぞ 敢へて人の働きのみならず人の處世に於ける自然の成行（天運）に得る軌（ミチ）と失ふ軌との二あり。

得る軌に入れる者は世の景氣不景氣に超越し生活常に安らかにして人生を樂むも失ふ軌に入れる者は之に惱みて人生を厭ふべし。得る軌とは祐氣の呼吸の齎す作用を指し、失ふ軌とは尅氣の呼吸の齎す作用を指す。祐氣の呼吸は人の本命の氣（誕生の際體内に稟保せる大氣）を助長育成す可く尅氣の呼吸は之を萎縮尅害すべし。

抑々人の本命の氣とは天地の其人に與へし得る軌たる特長とす。此の人の特長こそ人の生存を裨益し人の文化を向上せしむるものにして又一面人の世に於ける存在の必要性を作るものとす。されば特長なき人は世に存在の必要性なき人にして得る軌なく究極其生存の困難を來すべし。

自己の世に存在の必要性を強化擴大維持するこそ人の榮達の方途にして又祐氣の撰用こそ之が達成の緒端たり。別言すれば祐氣の効應は其成果必ず人の特長と爲りて表現するものにして此の特長を優秀と謂ひ、天禀と謂ひ、天才と謂ひ、才能と謂ふ。而して人の特長に一白より九紫に至る八種あり（五黄を除く）何人と雖も先天的に有する其本命の特長以外に尙七種の特長を後天的に附加するを得可く以て全人たり得可し。人の特長の發揮體現を業と謂ひ處世の用と爲す。則ち業無き人は得る軌なく生くる事能はず特長なき人は業を得ず生涯を盡くすを得ざるなり。

（九氣經濟學）

氣學講堂發行圖書目錄

頒布所　京都市右京區　嵯峨小倉山
氣學天壇役場

近刊	田中胎東編	九氣醫方	菊判和本二卷帙入	送料拾五錢 定價貳百圓
既刊	田中胎東編	大氣藥用必携	菊判和本一冊帙入	送料廿壹錢 定價拾貳圓
既刊	田中胎東編	九氣建築學	菊判和本二卷帙入	送料卅參錢 定價貳百圓
既刊	田中胎東編	九氣密意	菊判和本二卷帙入	送料卅參錢 定價百圓
既刊	田中胎東著	三界と家	四六判和本一冊	送料拾五錢 定價七拾錢
既刊	田中胎東編	氣學入門	菊判和本一冊	送料拾五錢 定價貳圓
既刊	田中胎東著	氣學の提唱	小版和本一冊	送料拾五錢 定價七拾錢

宇宙、大氣に關する新自然科學を提唱し以て既成宗教の爲す無きを罵り、新宗教興起の時期到來を叫ぶ

人と宇宙大氣との深緣を說き、神の加護佛の慈悲に浴する人爲の實際手段を敎ふ

人の住家は活物たるを示し以て人の處世に除禍招慶の具体策を垂示す

物質の構成も現象の生因も共に宇宙運行の大氣原子内に於ける九個の氣體粒子の機能より起る未知の眞理を述べたる大氣物理學たり

建築の保有する大氣の作用と共居住者の運命を說く新創有機建築學とす

宇宙運行の大氣を構成する大氣原子の機能を知り之を人體に藥用する新藥科學の書たり

人體の小天地たる所以を說き大氣を通じて天地と連絡するによつてのみ人體は生き得るものなる事を明らかにし大氣の善用を以て一切の病を治療する新發見の醫術とす

氣學講堂學則抄

（昭和五年十二月改正）

第一條　本講堂は人に宇宙大氣原子の體（カタチ）と用（ハタラキ）とを知得せしめ之を自己に活用實施せしめて人生、處世の怡樂に歡喜せしむるを目的とす。

第二條　本講堂の授敎に左の各科を置く。

各科別	一ヶ月講習料	講習期間	一ヶ月講習回數	定員
入門普通科	一〇円五〇	六ヶ月	三回	十二名
奥傳高等科	二〇、五〇	一ヶ年	二回	六名
極意三密科	二〇、五〇	三ヶ年	二回	三名

第四條　各科の敎授科目左の如し

入門普通科

大氣・輪廻（リンネ）・五行・天干地支・九氣作用・祐氣及尅氣・吉凶・相生・相尅・四盤・遁甲・六大凶殺・吉神・大歳・四淨土・運氣轉換法・用氣法（除禍招慶方術）・吉凶鑑別・

奥傳高等科

軌（レチ）・同會・線路・氣幾象・對中・三合・表裏・直線・卦象・八方・衍數・曆・體用・主及倆・心理氣學・九氣建築學（家相）運命鑑定法・大氣敎育學・

極意三密科

色と數・先天及後天・陰遁及陽遁・無極・太極・兩儀・四象・三界・金剛視・胎藏思・無より有を生ずる妙法・胎・九氣醫方・軍用氣學（軍人ニ限ル）探偵氣學・發明發見方・投機成功方・生理延命方・九氣經濟學・氣數理學・

第五條　本講堂入門希望者は紹介者連署を以て入門申込書を提出すべし。

第六條　但、入門申込書用紙は本講堂より交附す。

奥傳高等科入學者は入門普通科修了者より極意三密科入學者は奥傳高等科修了者より其入學希望者を以て之に充つ。

第九條　奥傳高等科修業證書被授者は本講堂の認諾を經て家相方位鑑定の開業を爲す事を得。

第十條　本講堂の開講日に無斷缺席二回以上に及ぶ者は除名停學すべし。

第十二條　氣學は如來の本願にして唯我獨尊に到るが故に之を他人と論議するを禁ず。

（詳細は學則を呈す）

氣學役員錄

（昭和十一年九月現在）

氣學講堂

京都市外向日町

師家　宗家　田中胎東

司事　中講教　古川國康

神奈川支舍長　中講教　渡邊勝明

千葉支舍長　權中講教　下里靜

山梨支舍長　權中講教　小菅冬

東京支舍長　權中講教　中井龜久

靜岡支舍長　權中講教　加久田安喜

福岡支舍長　權中講教　武井春美

愛知支舍長　權中講教　本多惠治

大阪支舍長　權中講教　岩田順三

埼玉支舍長　權中講教　西田銀

茨城支舍長　少講教　菅沼靖元

群馬支舍長　少講教　高橋晴

支舍長老　少講教　萩野貫一

九六教導部會

京都市嵯峨小倉山（氣學天壇內）

會長　宗家　田中胎東

西方支部長　中講教　大塚恒吉

東方支部長　中講教　久保田忠孝

幹事九六教導部　權中講教　山口クニ

幹事九六教導部　權中講教　押原實

幹事九六教導部　少講教　藤井仲治郎

幹事九六教導部　少講教　西岡清

幹事九六教導部　少講教　島英一

幹事九六教導部　少講教　辻春

幹事九六教導部　少講教　町野繁太郎

幹事九六教導部　少講教　伊藤寅武

幹事九六教導部　權少講教　須賀千世

九六教導部　權少講教　酒井利吉郎

九六教導部　權少講教　瀧勇

九六教導部　權少講教　石村じゆう

九六教導部　權少講教　野田良助

九六教導部　權少講教　松澤右一

九六教導部　權少講教　間野ハル

九六教導部錬補　權少講教　伊藤キヨ

九六教導部錬補　權少講教　落井七郎

九六教導部錬補　權少講教　菅沼啓一

九六教導部錬補　權少講教　西山源三

九六教導部錬補　權少講教　伊藤仁助
九六教導部錬補　權少講教　中島庸介
九六教導部錬補　權少講教　高田義保
九六教導部錬補　權少講教　山本賢治
九六教導部錬補　權少講教　安西春江
九六教導部錬補　權少講教　生駒籌
九六教導部錬補　權少講教　渡邊泰位
九六教導部錬補　權少講教　立石弘文

氣藥理醫部會

京都市嵯峨小倉山（氣學天壇內）

會長　宗家　田中胎東

東方支部長　權中講教　友成淑夫
幹事氣藥理醫部　中講教　友成安夫
幹事氣藥理醫部　權中講教　落井はる
幹事氣藥理醫部　少講教　石村イサヲ
幹事氣藥理醫部　少講教　山本トヨ
氣藥理醫部　少講教　友成梅枝
氣藥理醫部　少講教　渡邊奈美枝
氣藥理醫部　少講教　加藤小秀

理氣作胎部會

京都市嵯峨小倉山（氣學天壇内）

會長　宗家　田中胎東

東方支部長　幹事理氣作胎部　立石彌平次　權中講敎

幹事理氣作胎部　相羽芳雄　權中講敎

幹事理氣作胎部　端文治郎　權中講敎

幹事理氣作胎部　赤松貫二　權中講敎

氣藥理醫部　池田孝　權少講敎

氣藥理醫部錬補　伊藤弘　權少講敎

氣藥理醫部錬補　高柳八重　權少講敎

理氣作胎部　高柳喜三郎　少講敎

理氣作胎部　小林弘太郎　少講敎

理氣作胎部　高瀨昌　少講敎

理氣作胎部　勢力甚太郎　權少講敎

理氣作胎部錬補　太田義英　權少講敎

理氣作胎部錬補　古矢道平　權少講敎

氣育安居所

中央氣育安居所假所　宇治山田市中之切町九二

附屬　乾方氣育安居所　京都市外向日町（氣學講堂內）

第一氣育安居所　靜岡縣熱海町伊豆山八丁畑二七三

第二氣育安居所　群馬縣利根郡水上村大字湯原字諏訪原七二七

律主　宗家　田中胎東

中央安居所長　中講教　古川國康

第一安居主任　權中講教　加久田安喜

第二安居主任　少講教　高橋晴

氣學天壇

京都市愛宕山上（天壇）
京都市嵯峨小倉山（役場）

律主　宗家　田中胎東

宰事　權大講教　古川喜美

參與　中講教　加久田清正

參與　中講教　中井半三郎

參與　中講教　小菅增太郎

參與　少講教　須賀孝一

參與　少講教　篠本貞

參與　少講教　中井つね

參與　少講教　久保田文

參與　權少講教　久保田八百

參與　權少講教　池田漸

參與　權少講教　家永滿次

氣學修齊會

京都市嵯峨小倉山（氣學天壇內）

會長　宗家　田中胎東

幹事　少講教　山村彼面

附屬

天運纂修部

纂修長　中講教　大塚恒吉

纂修　權中講教　相羽芳雄

人の生存と天運の先導

人の天運は人類生路の先導を爲すものである。凡そ人の生存には其生路の氣的先驅があつて生命の持續を安全擁護して居るのである。生路の體は空なる氣で人の肉眼には見ないが心眼の開いた人には映するものである。所謂將來有望の人とは生路の先驅作用旺盛なる人を指したものであり、又影が淡い人とは之が衰痩せる人を指したものである。先驅作用が微弱となつて生路が細く弱くなると生活が不如意となり之が停止して終に生路が杜絶すると次の瞬間人體の死を現象するものである。

故に人の生死は先づ先驅する生路の開閉先導の如何より始まると謂ふ可きである。健康の始は生路の確立に出で成人の始は生路の完成に發するものである。教育の目的も政治の對象も醫藥の必要も畢竟人類生路開拓の道路工事を爲すに過ぎない。而して此の人の生存を確保先導する生路は則ち氣學の教ゆる祐氣の軌（ミチ）であつて祐氣を用ひて生路の强固安定せるを得軌（トクキ）の確立（德器の成就）と謂ふのである。天運の善き人は生路の善き人であり天運の惡き人は生路の惡き人である。人が常に其天運の是正涵養を圖るは則ち其生存の裕豐安固を圖る爲である。

自然の成行と人の運命

人の運命は人の行爲の果に非ず。人の行爲こそ人の運命の果と爲す。故に人は自ら運命を如何とも爲す能はざるべし。人は運命の奴隷なりとは實に至言たり。

然らば人の運命を主宰左右する者は何ぞ。自然の成行則ち是なり。

抑々自然の成行とは人を圍遶する現象にして宇宙大氣原子の營む作用たり。則ち人は自己を圍遶する自然の成行を常に自己に對し善良ならしめんと欲せば必ず其の生因たる宇宙大氣原子を重んじ絶へず其の祐氣を呼吸保有せざる可からず。

所謂神の加護、佛の慈悲とは即ち此の自然の成行による惠澤に浴するを謂ふ。

宇宙の母と人の睡眠

人は生れて母の胎内を出づると同時に宇宙の母の胎内に哺まれるものである。即ち母體を離れた生兒は其扶育の加護を宇宙の母より受けるものである。此の宇宙の母を大氣原子と謂ひ此宇宙の母の與へる氣的乳房を天運と謂ふのである。人の天運の豊裕は即ち天の母の授乳の裕かなるを示すものであつて天運が人の生路を先導する所以も亦此處に存するのである。

斯の如く人は日々宇宙の母の懷に抱かれて暮して居るのであるが一日の内で最も宇宙の母と密着接觸して居る時間は睡眠の時である。換言すれば睡眠時（一白の天德）は一日中に於ける人の最も深く宇宙先天作用の惠澤に浴する場合である。世俗に『寢る兒は育つ』といふのは此點を指稱したものであつて亦『眠れる病人は癒る見込がある』と云はれるのも之と同じ道理である。要するに人の眠るといふ事は最も宇宙先天作用の加護を豊受する手段であると同時に生路の進展を確保する方法である。眠れない人は斯る天與の特權を有効に使用出來ないものであつて結局生存上貧病の苦に惱まねばならない。今や催眠劑を用ひなければ安眠出來ざる人の漸く世に多きを聞くに至り其結果は知る可きのみである。斯る見地より電燈、瓦斯等近代文化の照明的進歩は日常生活上多大の利便を與へる反面に於て人類の安眠すべき天時を遲延せしめ單に不眠症の人を作出するのみならず睡眠の天德を減少衰退せしめ以て人類の生存を阻害してゐる結果を齎らしてゐるのである。之れが最善の對策は日常生活上常に祐氣を用ひて暮してゐる以外斷じて無いものである。

333
548

版權所有

昭和拾壹年拾壹月壹日印刷
昭和拾壹年拾壹月拾日發行

非賣品

著兼發行者　田中胎東　京都市右京區嵯峨小倉山町三番地

印刷所　小野原印刷所　京都市下京區猪熊通九條下川原城町七番地

發行所　京都市嵯峨小倉山　氣學天壇
電話嵯峨四二五番
振替大阪八一九九八番

終